

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 1 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2008～2011

課題番号：20242024

研究課題名(和文) 日韓集落の研究—弥生・古墳時代および無文土器～三国時代—

研究課題名(英文) The studies on the settlements in Japan and Korea—The Yayoi Period to the Kofun Period in Japan, and The Mumon Pottery Period to the Three Kingdoms Period in Korea—

研究代表者

武末 純一 (TAKESUE JUNICHI)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：80248533

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：集落, 弥生・古墳時代, 無文土器～三国時代, 環溝, 首長層居宅, 掘立柱建物, 海村

1. 研究計画の概要

(1) 本研究では、日韓集落研究会の組織を維持しながら、日本の弥生時代～古墳時代および韓国の無文土器時代～三国時代の集落について、系統や影響関係を検討し、比較分析を行なう。

(2) 研究の多様化(多様な視点の形成)をはかり、発表や議論を通じて新たな成果をえるとともに、日韓の研究者による分析方法や分析資料、分析結果を共有する。

(3) 具体的な研究課題は以下の通りである。①農村とは別の理論で動く海村(特に海上交易活動を担う)の解明。②日韓双方での渡来人集落の様相解明。③当該時期の日韓両地域の生産集落の解明。④日韓の環溝集落・高地性集落(山村)の解明と関連性や比較検討。⑤日韓の首長層居宅や都城の解明と関連性や比較検討。⑥日韓両地域の住居跡の動態分析。

(4) 以上のために、年1回研究会を開き、韓国側研究者を毎年7～8名招聘するとともに日本側研究者も韓国の資料を調査する。また年度末に中間報告を刊行し、日韓の基本文献をそれぞれ訳出する。日韓両国の研究者の長期的な信頼関係を築き、韓国研究者が日本の資料を、日本の研究者が韓国の資料を取扱う論文を書けるようにする。

2. 研究の進捗状況

(1) 日韓集落研究会は現在、研究代表者、分担研究者、連携研究者および日韓の研究協

力者あわせて43名(日本側17名、韓国側26名)で構成されている。

(2) 平成20年度に大阪で生産遺跡の検討を中心に、平成21年度は韓国の江陵で、平成22年度は東京で、「日韓集落研究の新たな視角を求めて」IおよびIIと題して共同研究会を開催し毎回資料集を作成した。また毎年5月には東京で国内関係者による打ち合せをしている。方法論や視点では集落構造論や空白論あるいは集落の中での遺物のありかたの検討の重要性が会員に共有されつつあり、住居跡分析の重要性や、重複住居の検討による住居数の推定などが新たに提起された。

(3) 具体的な成果は、①日韓の環溝集落の様相や韓国仁川市雲北里遺跡や島根県山持遺跡など楽浪土器をもつ海村の解明。②渡来人集落も従来の日本側での無文土器人の集住だけでなく、韓国の亀山洞での弥生人の集住、日韓の国際交流港での古墳人や加耶人、百濟(馬韓)人の集住の解明。③金属器生産遺跡の解明や馬飼集団の集落の解明。④韓国の環溝集落を同一視点でとらえる論。⑤弥生・古墳時代の集落を地域の中で連続的に捉え、首長層居宅を位置づける論。あるいは百濟前期都城の様相解明。⑥日本人による韓国の粘土帯土器期の集落分析、韓国人による日本の松菊里型住居分析などが得られた。

(4) 中間報告書も毎年度末に刊行し、活動記録とともに日韓の集落関係基本文献をこれまで5篇訳出した。また平成20年度は5名、21・22年度は8名の韓国人研究者を招聘

し、その際にも研究発表をしてもらっている。本研究の影響で韓国では集落関係の学術大会が多くなった。日韓研究者相互の信頼関係もきわめて高くなり、本研究参加の日本人研究者が韓国のさまざまな学会で発表する機会がかなり増えた。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

当初の研究分担者や研究協力者とともに韓国側の研究協力者も順調に組織できた。各人の研究テーマも研究計画にそって弥生時代・古墳時代および無文土器～三国時代にわたってバランスよく配列されつつある。日本側の住居跡分析が出遅れたが、大阪市立博物館の寺井誠氏の加入で軌道に乗りつつある。原稿も予定通り提出できる見通しである。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 当初の研究計画通り、平成 23 年度末に研究成果報告書を刊行する。研究協力者の人件費が大幅に膨らんだため、報告書での韓国語の併記が不可能になった。そこで、韓国側と話し合った結果、日本語版をこの科学研究費によって作成し、韓国語版は、韓国側で別途に出版することとなった。

(2) 各人の補足資料調査は予定通り 9 月末までとする。今年も韓国側研究者を 8 名招聘する。

(3) 8月 26～28 日に韓国の韓神大学校(予定)で、今回の研究に関わる日韓の研究者(代表者、分担者、協力者)が全員集合し発表するとともに、議論と検討も重ねる。その結果をもとに 10 月末に全員原稿を提出する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 40 件)

- ①重藤輝行「北部九州における古墳時代～古代の集落・首長居館に関する一考察」『第 5 回(財)中原文化財研究院・日本東アジア考古学会学術大会 韓日集落研究の現状と課題』中原文化財研究院 pp137-167 2011 年 査読なし
- ②武末純一「集落からみた渡来人」『古文化談叢』第 63 集 九州古文化研究会 pp3-20 2010 年 査読あり
- ③亀田修一「遺跡・遺物にみる倭と東アジア」荒野泰典・石井正敏・村井章介編『日本の対外関係 1 東アジア世界の成立』吉川弘文館 pp286-304 2010 年 査読なし

④武末純一「三韓と倭の交流—海村の視点から—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 140 集 pp267-286 2009 年 査読あり

⑤坂靖「奈良盆地の古墳時代集落と居館—前期～中期における政治的動向—」『考古学研究』第 65 巻第 2 号 pp29-44 2008 年 査読あり

⑥山本孝文「考古学から見た百済後期の文化変動と社会」『百済と倭国』高志書院 pp37-66 2008 年 査読なし

[学会発表] (計 34 件)

①高久健二 2010. 7. 24 「渡来の実態—境界を越えた人・もの・技術—」(第 75 回歴博フォーラム「アジアの境界を越えて」) 新宿明治安田生命ホール

②重藤輝行 2010. 2. 14 「筑前における 7 世紀の集落—福岡県遠賀郡遠賀町尾崎・天神遺跡を事例として—」(九州古文化研究会第 153 回例会) 北九州市立埋蔵文化財センター研修室

③田中清美 2009. 10. 23 「古墳時代のムラと渡来人」(第 20 期大阪市いちょう大学—歴史と考古学コース—) 大阪市立総合生涯学習センター

④桃崎祐輔 2009. 9. 18 「牧の考古学—古墳時代牧と牛馬飼育集団の集落・墓—」(日韓集落研究会第 5 回合同研究会「日韓集落研究の新たな視角を求めて」) 江陵大学校博物館

⑤松木武彦 2009. 9. 18 「山陽地域の弥生・古墳時代集落」(日韓集落研究会第 5 回合同研究会「日韓集落研究の新たな視角を求めて」) 江陵大学校博物館

⑥橋本博文 2008. 5. 25 「古墳時代豪族居館と渡来人の存在形態—群馬県伊勢崎市今井学校遺跡の調査から—」(日本考古学協会第 74 回総会) 東海大学湘南キャンパス

[図書] (計 8 件)

①武末純一編 2011 年『日韓集落の研究—弥生・古墳時代および無文土器～三国時代—(中間報告 3)』日韓集落研究会 総 36 頁

②武末純一編 2010 年『日韓集落の研究—弥生・古墳時代および無文土器～三国時代—(中間報告 2)』日韓集落研究会 総 107 頁

③武末純一編 2009 年『日韓集落の研究—弥生・古墳時代および無文土器～三国時代—(中間報告 1)』日韓集落研究会 総 163 頁

④松木武彦 2009 年『進化考古学の大冒険』新潮社 総 255 頁

⑤坂靖 2009 年『古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴輪文化—』雄山閣 総 368 頁